

# 「社会の形成者」としての公民的な資質・能力の基礎を育む

## 小学校社会科の授業づくり

### ～社会へ参画する力の育成を目指して～

石田 琳太郎（教育実践コース）

#### 1 探究課題の検討

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）』から、「平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期すという目的」、「主体的に社会の形成に参画し、その発展に寄与する態度を育てること」が明確になった。また、2016 年 12 月 21 日の中央教育審議会答申から、今日の社会において、小学校学習指導要領にも定められている「社会の形成者」として子どもたちが成長するために求められている力は、よりよい社会を構想し積極的に参画する力だと筆者は捉えた。

##### (1) 現代社会の現状と小学校社会科が担う役割

###### ① 現代社会の現状

日本財団は、2019 年 9 月下旬から 10 月上旬にかけて「18 歳意識調査」で、日本を含む数か国の 17～19 歳各 1000 人を対象に国や社会に対する意識を調査した。ここから、筆者の探究課題にある「社会の形成者」に深く関係している「自分で国や社会を変えられると思う」項目について、日本の 18 歳の若者の主体的に社会に参画する意欲が諸外国に比べ極めて低いことがわかる。そこで、学校生活の中で多くの時間を占める授業において、知識の習得のみに留まるのではなく、子どもたちが習得した知識をもとに自身の意見や考えを提案するなどの経験を積ませることが必要だと考えた。

###### ② 小学校社会科が担う役割

『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説社会編』などから、子どもたちに求められる「よりよい社会を構想し積極的に参画する力」を育むため、社会科において公民的な資質・能力の基礎を育むことが必要だと分かった。さらに筆者は、公民的な資質・能力の基礎の根底にあるものは「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」だと考えた。なぜなら、子どもたちが主体的に関わろうと思わなければ、そもそも知識や技能を身に付けようと思わず、そこから思考、判断、表現にもつながらないからである。そのため、目指す小学校社

会科の授業づくりを「社会の形成者としての公民的な資質・能力の基礎を育む」と題し、その中で「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」を最も育むべき資質・能力だと考えた。

##### (2) 先行研究・実践とそこから抽出した重要となる要素

###### ① 先行研究・実践

社会参画を目指した社会科の授業づくりについて、唐木らの「社会参加学習」と北らの研究の二つを調査した。また、新潟大学附属新潟小学校による令和 2 年度初等教育研究会での社会科授業をモデルとし、授業実践の中で重要となる要素（以下、「重要要素」）を四つ抽出した。

###### ② 授業実践の中で重要となる要素

・「社会的事象を自分事として捉えさせること」（以下、「自分事」）

様々な文献から、筆者は社会科において子どもたちが学習内容を「自分事として捉えている」姿を、「今まで意識していなかった自分の生活と社会的事象との関連を見出し、課題意識をもった上で、今後の在り方を構想している姿」と整理した。また、検討を重ねる中で、自分事とさせるためには何か一つ手立てを設ければ良いのではなく、単元を通して三つの段階を子どもたちに踏ませる必要があると考えた。「①今まで意識していなかった自分の生活の中の社会的事象に気付く」（以下、「自分事①」）、「②社会的事象を生活と関連付け、現状を分析し実態を学ぶ」（以下、「自分事②」）、「③社会的事象の今後の在り方を構想する」（以下、「自分事③」）というものである。

・「社会的事象の中の他者の価値観に触れさせること」（以下、「他者の価値観」）

子どもたちが社会的事象を分析的に処理し、個々の情報に価値付けを行うためには、当該学習内容に関わる他者の価値観に触れ、自身の価値観が揺さぶられ広げられることが必要である。

・「多角的な自分なりの考えをもたせること」（以下、「多角的」）

子どもたちがより良い社会を構想し自らの関わり方を意思決定していくためには、独りよがりでない自身と他者の価値観を踏まえた考えをもつことが必要である。

・「社会的事象に対し自分だったらと考えを提案させること」(以下、「自分だったらと提案」)

自分は地域や日本に住む一人の人間であり、将来社会を作っていくのだという自覚をもたせ、実生活との結びつきを強く感じさせるためには、他者へ考えを提案することが必要である。

## 2 四つの重要要素を小単元に組み込んだ社会科授業の実践

(1) 単元の設定と、四つの重要要素を組み込む際の手立て・評価方法

### ① 単元の設定

小学校5年社会科「水産業のさかんな地域」を選択した。島国である日本に住む国民として、日本の漁業の問題は他人事ではないという認識をもたせたかったこと、小学校社会科において筆者が子どもたちに考えさせたい内容が「今後の社会の在り方」であり、子どもが「今後の社会の在り方」について思いを巡らせやすい単元の構造となっていたことの二つが理由である。

### ② 四つの重要要素を組み込む際の手立て・評価方法

四つの重要要素を「水産業のさかんな地域」にどのような手立てとして組み込むか、どのような姿をどのような方法で評価するかについて、他の院生、教授と検討しつつ設定した。

(2) 実習校での授業実践と結果・考察

### ① 実習校での授業実践

#### ・第1時

7月の給食に水産物が含まれる日数や、日本の漁業生産量の推移のグラフを提示した。そして重要要素の「自分事①」の手立てとして、「どうして日本でとれる魚の量が減っているのかな」という学習課題を設定した。

#### ・第2時

第1時に設定した学習課題を調べ、ロイロノートにまとめる活動を行った。

#### ・第3時

「自然環境」と「漁をする人の数」グループの意見を共有したり、日本の周りの海流や水産業に携わる人について資料を読み取らせたりした。重要要素の二つ目「他者の価値観」の手立てとして、水産業に関わる人の具体的な職業、仕事内容など

を調べさせ、そこに共通している価値観を学ばせる活動を取り入れた。

#### ・第4時

「一般人」と「魚」グループの意見を共有したり、その二つを「人間の行い」グループへとラベリングし直したりした。

#### ・第5時

様々な要因で日本の漁業生産量が減っているという学習課題のまとめを作成し、新たな学習課題「日本の漁業生産量のグラフが上向きになるためには、どのような対策が必要かな」を設定した。重要要素の「自分事②」の手立てとして、水産物がとれなくなったら自分たちの生活にどのような影響が及ぶかを考える活動を取り入れた。

#### ・第6時

第5時に設定した二つ目の学習課題について自分で観点を一つ選択し調べさせた。重要要素の「自分事③」の手立てとして、自分の調べたい観点を選択し、同じ選択をした人とグループで解決方法を探す活動を取り入れた。

#### ・第7時

グループごとに調べた内容を発表させまとめを作成した。重要要素の三つ目「多角的」の手立てとして、子どもたちが自身で選択した各観点から取り組むべき対策を共有する活動を取り入れた。また、この時間には重要要素の四つ目「自分だったらと提案」の手立てもあり、自分たち消費者にもできる対策を友達と交流し伝え合う活動を終末に取り入れた。

### ② 評価材料の結果と考察

評価材料である振り返りシートの記述を、四つの重要要素の視点で見えていく。

表2 「2年次前期実践の達成状況」

重要要素	2年次前期実践					
	「自分事」			「他者の価値観」	「多角的」	「自分だったらと提案」
	①	②	③			
人数(人)	19 29	18 27	20 28	2 27	0 28	17 28
割合(%)	65.5	66.7	71.4	7.4	0	60.7
	「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」 (今後の自身の行動を変容させようとしている記述)					
人数(人)	18 29					
割合(%)	62.0					

重要要素の達成状況以外にも項目を追加した。なぜなら、第7時だけでなく、単元の途中の時間

の振り返りからも日本の水産業の現状に対し課題意識をもって自分にできることを実践したいと、自身の行動を変容させようとしている記述が見られたためである。そのような「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」が育まれていると言える子どもたちは、29人中18人(62.0%)であった。

また、「自分だったらと提案」は約6割の子どもが達成できたが、第7時にうった手立てが自分たち消費者にもできる対策を友達と交流し伝え合うという半ば強引な活動であったことが強く影響していると考えた。そのため、成果とは言い難い。

### (3) まとめ

#### ① 成果

結果として、子どもたちは重要要素のうち「自分事」のみを達成した。本研究の目的である「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」に関しては、62.0%の子どもたちが学習内容を自分事と捉え、水産業の現状に対し消費者の一人として自分には何ができるか意見をもたせる授業を実践することができた。

#### ② 課題

授業技術面では「授業の指導案作成の段階で時間配分を甘く見積もってしまっていたこと」があった。また、研究面では「他者の価値観」、「多角的」について、達成することができたと言える子どもの割合(%)が1桁となってしまったこと、直接的に「自分にできること」を問う手立てを見直し、子どもたち自身から問いが発せられる新たな手立てを考える必要があることなどが課題として残った。

## 3 四つの重要要素を大単元に組み込んだ社会科授業の実践

### (1) 重要要素の関連性と組み込む際の枠組み

#### ① 重要要素の関連性

それまで独立的だと捉えていた重要要素の関連性を以下のように見直した。

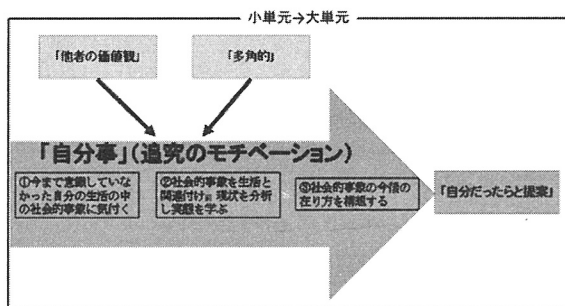


図5 「四つの重要要素の関連性」

#### ② 重要要素を単元に組み込む際の枠組み

本来、大単元は一貫した社会的事象を扱う構成になっていること、2年次前期の実践後の課題として「学習活動を多く設定し過ぎてしまった」ことなどから、重要要素を組み込む枠組みを今までの小単元から大単元に広げることとした。

### (2) 単元の設定と、四つの重要要素を組み込む際の手立て・評価方法

#### ① 単元の設定

情報化の進む現代、そして将来を国民として、情報の扱い方を学ぶことは他人事ではないという認識をもたせたかったため、小学校5年社会科「情報を伝える人々とわたしたち」とした。

#### ② 四つの重要要素を組み込む際の手立て・評価方法

四つの重要要素を、大単元「未来とつながる情報」にどのような手立てとして組み込むか、どのような姿をどのような方法で評価するかを設定した。

### (3) 実習校での授業実践と結果・考察

#### ① 実習校での授業実践

##### ・第1時

『情報』とはどんなものだろうという学習課題を設定、追究した。その過程で、重要要素の「自分事①」の手立てでもある、「情報」とはどのようなものがあるか、それを得る手段は何か、もし手段が無くなったら自分たちの生活にどのような影響が及ぶかを考える活動を取り入れた。

##### ・第2時

重要要素の「自分事②」、「他者の価値観」の手立てでもある、ペアで互いに相手に伝えたい内容をアナウンサーのように伝え合う活動を取り入れた。

##### ・第3時

子どもたちの録画とプロのアナウンサーを比較させる活動を取入れ、学習課題「ニュース番組を作るとき、テレビ局の人たちはどんな工夫をしているかな」を設定した。その後、重要要素の「他者の価値観」に向けての視点をもたせるため、学習課題に対する予想を「誰が」、「どんな工夫をしているか」という形式でたてさせた。

##### ・第4時

ニュース番組制作に携わる人々の役割の中から、子どもたち自身で調べたい役割を選択させ、重要要素「自分事②」、「他者の価値観」の手立てである、設定したニュース番組制作に関する学習課題を調査する活動の時間とした。

##### ・第5時

「メディア」、「マスメディア」という語句を学習した上で、学習課題「テレビ以外のメディアに

はどんな特徴があるかな」を追究させた。また、重要要素「多角的」の手立てとして四つのメディア機器を用意し、メディアの性質を多角的に捉えさせるために便利な点と不便な点を表にまとめる活動を取り入れた。

・第6時

重要要素「自分だったらと提案」の手立てとして、2020年のトイレットペーパー買い占めをスライドで紹介し、改めて生活との関連性を印象付ける活動を取り入れた。

② 評価材料の結果と考察

評価材料である振り返りシートの記述を、四つの重要要素の視点で見えていく。

表2 「2年次後期実践の達成状況」

重要要素	2年次後期実践				非実践小単元
	「自分事」 ①	「自分事」 「他者の価値観」 ②	「多角的」	「自分だったらと提案」 ③	
人数 (人)	26 28	19 29	17 29	20 29	27 28
割合 (%)	92.9	65.5	58.6	69.0	96.4
「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」 (今後の自身の行動を変容させようとしている記述)					
人数 (人)	25 29				
割合 (%)	86.2				

前期実践と同様に、第6時だけではなく、単元の途中の時間の振り返りからも「情報」に関し自身の行動を変容させようとしている記述が見られた。そのような、「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」が育まれていると言える子どもたちは、29人中25人(86.2%)であった。

#### 4 実践を通しての成果と今後の展望

##### (1) 実践を通しての成果

2年次前期実践では四つの重要要素をそれぞれ個別で独立したものと捉え、実践、検証した。しかし、前章でも述べたように、2年次後期実践では重要要素が共通している点もあると考え、手立てを設け評価した。そのため、二つの実践を四つの重要要素の視点から比較することは難しいと判断し、二つの実践における「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」の視点から比較することとした。具体的な子どもの姿を明らかにする。

・2年次前期「水産業のさかんな地域」

「農業や水産業の現状を理解し、抱える課題を把握した上で、『より多くの人に現状を知ってもらうためにPRをしたい』、『私たちにできることは消費量を上げることだから、今後やっていきたい』

と自らにできることを具体的に捉え、主体的に取り組もうと考えている姿」。

これは、17人(60.7%)の子どもたちが目指す姿を達成することができていた。

・2年次後期「情報を伝える人々とわたしたち」

「社会の情報化や放送など情報産業の現状を理解し、抱える課題を把握した上で、『私たちが今後情報を受け取ったり発信したりする時は、デマに惑わされず情報が本当か確かめるメディアリテラシーに気を付けて行うことが大事だ』と自らと情報との上手な関わり方を具体的に捉え、主体的に取り組もうと考えている姿」。

これは、20人(69.0%)の子どもたちが目指す姿を達成することができていた。

二つの実践を比較すると、達成割合はわずかに向上したのみに見える。しかし、記述内容の具体性(具体的な自身の今後の行動)に着目すると、より具体的な記述をしている子どもの人数は、前期から後期へ2.5倍以上増加した。割合も、2.5倍の増加という結果となった。つまり、2年次後期実践の方が、より「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」、ひいては公民的な資質・能力の基礎が育まれていると言える。これにより、手段である四つの重要要素も、小単元ではなく大単元という枠組みの中で流動的に組み込むことが有効だと言えるのである。

##### (2) 今後の展望

本実践を通して、現代社会の抱える課題である社会へ参画する力を高めることを目標に、公民的な資質・能力の基礎、つまり「主体的に社会的事象に関わろうとする態度」を育むための小学校社会科の授業づくりを追究した。厳密に目的を達成することができた子どもたちの割合は最終的に62.1%であり、まだ十分な成果とは言えないが、唐木らの「社会参加学習」の最終段階を「提案」とした一つの発展形を示すことができたのではないかと考える。また、四つの重要要素の相互の関連性や、それらを手立てとして設定する一つの授業が数時間集まって小単元を成しており、さらにその小単元がいくつか集まって大単元と成しているという、単元構成の意義が見えてきた。

実践させていただいた小単元は小学校5年社会科の公民的分野という限定的な範囲であるが、小学校社会科には、他にも歴史的分野や地理的分野があり、それらの実践、検証までは至ることができなかった。そのため、今後各教科・領域、各分野といった様々な視点からアプローチを掛け、長期的な視野で解決策を追究する余地がある。